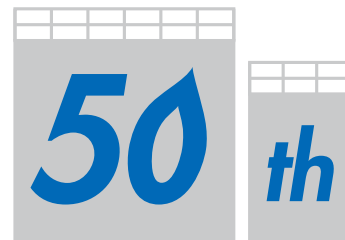


STORAGE

Challenge Next



TOYO GOSEI
高浜油槽所

東洋合成工業株式会社



高浜油槽所50周年記念サイトは
こちら



th
Anniversary



ロジスティック事業部
高浜油槽所

人と産業を支えて50年



ご挨拶

日本が1970年代の高度経済成長を遂げ、二度のオイルショックを経て、当社が新たな事業モデルを求めるなかで、高浜油槽所は、昭和43年(1968年)に用地取得、昭和46年(1971年)の開設に至りました。その後、化学産業は大いに発展し、石油化学の拡大、グローバル化、中国の発展、機能性化学品へのシフトなど、日本の産業の進化に合わせ、サプライチェーンは大きく変化して参りました。

その変化の度に、“想像できることは実現できる”、“真にお客様のお役に立つ”との強い信念のもと、ご要望に真摯に向き合い、安全で確実な保管や配送を実現すべく、常にお客様とともに新サービス・新技術を開発して参りました。そのおかげをもちまして、さまざまな充填や荷姿変更、ブレンド、立体ドラム自動倉庫、安定配送、長期保管、温度管理、ファインケミカルで磨いた技術力を活かした、精製、品質管理、品質保証、保全技術、安全技術、事業継続計画、電子化など、数多くのサービスが実現でき、50周年を迎えることができたことを、社員一同、心より感謝申し上げます。

昨今は、『さらに利便性の高い、安心な保管と配送』の実現を目指し、現状把握からDXにも取り組んでおります。今後とも、『顧客満足度向上』と『安全』を二本柱に、当社と協会の社員一同力を合わせ、時代の変化に対応するロジスティックサービスの創造に精進を重ねる所存でございますので、どうか皆様の引き続きのご愛顧、ご指導、ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

代表取締役社長

木村 有仁



このたび高浜油槽所は50周年を迎えました。これもひとえに皆様からのご支援とご愛顧の賜物であり、心から感謝を申し上げます。

私と高浜油槽所との出会いは1996年に遡ります。当時は荷主企業に入社した新入社員でした。まずは物流の現場を学ぶという目的で高浜油槽所を訪れました。それまで見たことのない大きなタンクが何十本もそびえ立って、迫力がありながらもきれいな油槽所だという印象を持ちました。初めて社外の人と名刺を交換したのもその時です。私が社会人としてデビューした場所も高浜油槽所でした。

その後、縁があって当社に転職し、ロジスティックの営業を担当しました。お客様から求められていることの多さと複雑さに翻弄されながらも、高浜油槽所を活用してお客様のビジネスに貢献し、感謝されることに喜びを感じました。部署異動を経て2年前にロジスティック事業部の責任者として、再び高浜油槽所の運営に携わるようになり、幸運にもこの大きな節目のタイミングを迎えることができました。今後お客様と一緒に、その先のお客様のニーズに応じていく、その姿勢に変わりはありません。近年は経験したことがないスピードでビジネスの環境が変化しています。そのなかで溶剤市場を物流面から支える油槽所として、諸先輩方が築き上げた50年の伝統を礎に、次の50年に向けて事業部員とともに新たな気持ちで歩みを進めていきます。

上席執行役員 ロジスティック事業部長

吉田 勇



50周年!まずは礎を築いた先輩たちに感謝です。それからほんの少し昔のことを書きます。

私と当社との縁は“地元で頑張っている企業”を就職の選択肢の一つにしていたからです。当時は分厚い就職情報誌がたくさん送られてきて、当社はそのなかの一社でした。ひと際木村会長(当時社長)の言葉に惹かれたのを今でも覚えています。『成功率50%を超える事業には手を出さない。誰かがトライしている確率も高く、既に出遅れている。20%以下の事業を必死で実現させる。独占も狙えるよ』とキラキラした目で語っていました。勿論失敗も多かったと思いますが、常に新しいことにチャレンジし続け、前を向いていました。

3.11東日本大震災の時も我々は下ばかり向いていたのですが、会長は先のことを考えていました。高浜油槽所には会長のアイデンティティや工夫された思想が至るところにあります。

これらのことを少しでも多く後輩たちに伝承していくのが私の責務だと感じています。まだ続く未来へ!

高浜油槽所 所長

鈴木 城治



高浜油槽所OBからのメッセージ



「最近顔を見ないね・・・」と私の肩をその怪力で揉む彼は私がかつて高浜にいた頃の仲間。

高浜での私の仕事はお客様、事務方の高浜業務、現場で作業を行う協力会社を調整し、お客様の要求を実現することでした。お客様の要望はまず絶対。しかし現場や事務方にもそれぞれ事情があります。私はこの三者に挟まれる形で調整をするのですが、かなり辛い案件もありました。

私は時間を見つけては現場に出て一緒に手を動かし、要望を聞いて私ができる改善を少しずつでもやるようにしていました。それはお客様、事務方に対しても同様でとにかく話をして細かい要望を拾っていきました。時としてどこかに無理をお願いしなければならない難しい案件が出てきますが、有難いことにお客様、事務方、現場、皆助けてくれました。

「最近顔を見ないね・・・ また、高浜に戻ってきてくれないかな～」肩は痛みますが彼の笑顔にはいつも癒され、また仕事を頑張ろうと思ってしまう。

執行役員 環境安全部 部長 **中渡 孝**

※品質保証責任者として在籍



もうすぐディズニー40周年で思い当たること。1980年代中頃は隣の浦安ではディズニーランドが開業し、日本中が湧きました。その頃、高浜では石油燃料からクリーン燃料志向でLPG建設工事が始まり、危険物タンク基地内に高圧ガスのLPG施設を同居するということになり、法の規制対応が大変な時期でした。その後許可が下り、2,000kLのガスタンク3基が据付されました。普通LPGガスのタンクは球形ですが、あえて現場組の球形ではなく、熱処理で欠陥の少ない工場製作で最大級の横長の枕型です。九州から海上輸送で、陸揚げ据付は圧巻でした。数千tクラスの海上クレーンのアーム高さは100m位でしょうか、通勤途中の遠方からでも先端が震って見えました。そして3カ所目のLPG専用バースも許可が下り建設できました。2000年代になり、ディズニーシーができるころ、このLPG基地を使用する話も出ましたが、時代の流れで撤去することになりました。さて跡地で何をやるか。安定志向のタンク業界で、先陣を切ることを命題として、大量輸送のISOコンテナ車の増加を見込んで2,000kLのタンク2基、ISOコンテナ対応のローリー充填所の併設、ドラム充填の完全自動充填機の導入、屋内で空ドラムを置ける広いドラム充填所、向かいにはドラム1万本の立体自動倉庫、また物流の多様化のためにさまざまな詰替えができる設備の投資を一気にすることができました。

お客様から「きれいな油槽所ですね」とおっしゃっていただけることが一番うれしかったですね。安全、安心な高浜油槽所はこれからも進化するでしょう。

調達部 参事 **石亀 義之**

※前油槽所長として在籍



創業者木村正輝が語る
高浜油槽所



誕生物語

創業者である故木村名誉会長が、
当社60周年の記念に書かれた高浜油槽所
誕生の物語が直筆で残されていました。

高浜油槽所の建設に至った
経緯、秘話、人知れない苦労など、
当時のことを振り返りながら、
熱く語られています。

高浜油槽所50年の節目に立ち、
木村会長の情熱と意思を受け取るとともに、
高浜油槽所建設からこれまでの
成長を支えてこられた皆さんの意思を
受け継ぎ、次の50年に向けて歩み続けます。
今回、一部編集を加え、掲載しています。

市川工場の増設と公害問題

戦後始まった日本の石油化学産業は、池田首相の所得倍增政策に乗って継続的に需要が増大した。この需要を満たすべく、南は九州大分から瀬戸内海の徳山、岩国、四国 松山、伊勢湾の四日市、東京湾の京浜、五井市原にかけてナフサを原料にエチレン製造装置を中核とするコンビナートが形成された。

昭和32年ごろから始まった石油化学産業の大発展に合わせ、当社は輸入した石油化学製品の蒸留精製から、日本の石油化学製品であるオキシ法のアルコールを原料に、エステル化、脱水素、酸化技術を使った農薬、塗料溶剤等の液体化成品の製造に転換した。

市川工場ではタンク、プラントを次々に増設。必要な資金は銀行融資に頼った。相次ぐ増設に、当時の労組従業員は会社が大儲けしていると思い込み、昇給、ボーナスの増額を要求して度々ストライキを敢行し、その都度、取引先や銀行に頭を下げて回った。一方、市川市の市街地に立地する工場も生産設備の増強を行い、近隣住民との間で、騒音、振動、悪臭等の公害問題が多発した。住民と事業所の間に立たされた市川市は法律の不備もあって解決に頭を抱え込んだ。

当時、中堅企業の総務部門責任者の経験を持つ市川市長は、問題解決策として、臨海部に中小企業向け工業団地の埋立て造成を計画立案した。公害問題を抱えた市内の企業の事業所に、高浜と千鳥町埋立地への進出を勧誘したが、全く応募会社はなく、商工会議所開催の説明会でも空席が目立った。

困った市長は、農業委員会会長時代に交渉で顔を合わせた小生を理屈っぱいが誠実だと思って、「市川市内企業」として進出するよう直接要請に来られた。しかし当時の当社は、地元千葉県金融機関に取引がなく、創業した時の江戸川区の銀行と信用金庫に会社の全財産を担保に入れ、三拝九拝してやっと融資していただいたのが実情であった。

このような当社の金融状況を知った市長は、地元市川信用金庫の責任者を呼び、市川市政に協力して当社に埋立地購入資金を融資するよう要請してくださり、契約金の半額の融資が決まり、八千坪の工場用地を契約した。



創業者木村正輝が語る

高浜油槽所誕生物語

ぬかるみの土地からの出発

契約進行に合わせ、譲渡される土地は何処か、会社の幹部と現地調査に出掛けた。埋立地造成は、直径1mの鉄管を海中に突っ込み、ポンプで海底の砂を海水ごと吸上げ、埋立て予定地の一番奥まで送水・噴出させ、海水中の砂を沈殿させながら残った海水を海に流し込んでいた。従って、粗い砂は海水噴出場の近くで沈積し、海に向かって次第に細かい砂が沈殿するようになる。陸に近い方は粗い砂、先の海岸はヘド口に近い土の埋立地になった。

誰でもヘド口の土地より硬く締まった粗い砂地の土地を選びたい。また、海岸は台風時に大波が押寄せ波しぶきで塩害が出る。当社も埋立ての内陸側の土地譲渡を希望したが、市川市の担当者は知名度の高い有名企業の誘致を優先し、当社は海岸側になってしまった。現地立会いで当社の分譲予定地は沖に1本の笹竹が立つ所と判明し、同行の市職員は笹を指差して「貴社予定地です」と言った。帰社後、取締役会で実状を説明したが、「権利書も無い笹1本が立つ海に2億円近い契約金を支払うのは無謀だ」と異口同音に全員に反対された。以後市川市に何度となく区画割り当ての変更をお願いしたが、徒労であった。

前述のごとく、砂とともに吹上げられた海水は、高浜の道路の内側を川となって流れ下り現A栈橋附近の鋼矢板で囲ったプールに入っていた。高浜油槽所の皆さんには、現在の波返し護岸の下は、こうした造成地なのだと理解してほしい。市川工場が手挟になり、石化メーカーの発注増加のために安くなった下請加工費を量産で補わねばならない当社にとって、量産設備をつくる土地の入手は緊急の課題であり、この契約以外の選択肢は無かった。

こうして昭和40年に契約し、43年に埋立てが完了した。残っていた半額の支払代金の調達を始めようとした時、千葉銀行市川支店の名物支店長が来社し、千葉銀行の融資が決まった。以後高浜の設備資金の大半は、千葉銀行の融資で賄われた。

造成地の完成後に測量が行われ、登記面積は堤防護岸の天場内側が境界になったが、法律上は護岸の外側、潮位の平均水位までが当社の所有地である。完成時、地表の水準が現道路の路面より約1m高く、市川市はその表層の砂を道路工事に持ち出そうと目論んだが、当社は持ち出しを拒否した。その後、敷地のヘド口は圧密沈下し、現在は路面からの高さは10cmに満たない。

工場用地として購入した高浜町に市川工場のタンク群を移設し、跡地に新たな設備を建設する計画で工事を開始した。幸い会社の業績も次第に好転し、事務所、ボイラー室、受電所と次々に建物を建て、工業用水用の井戸も掘った。

当時、京葉地帯の五井市原の工業地帯も、工業用水に地下水を汲み上げたために湾岸地域の地盤が毎年10cm近く沈下していた。

国はこの事態を重く見て、突然地下水利用禁止令を発令した。化学工場が上水道を冷却水に使ってコモディティー製品を製造しては水道代で競争力が劣ってしまう。市川市は対策として、高谷新町の埋立地同様な工業用水道の計画を説明されたが、完成時期は先で、工場の稼働開始がいつとも知れぬという危機が訪れた。

ファインケミカルを指向し、初の海外出張へ

昭和45年、市川工場で製造していた塗料溶剤やペンキ材料より付加価値の高いファインケミカルを指向しようと、私は、工事を中断したままヨーロッパ視察団に参加し、初めての1ヶ月間の海外出張に出発した。四発のプロペラ機で香港、バンコク、ボンベイ、バグダードと途中何度も給油してローマに到着した。イタリア、スイス、ドイツ、フランスなどヨーロッパの著名化学会社の主要工場を訪問した。ドイツの百貨店では、一行の買い物に20年前に習ったドイツ語が役に立った。

オランダでは工場見学の代わりにロッテルダム港のタンク倉庫群を見て回った。あまりにも多数の大型タンク群と、その間を整然と走る銀色をした多数の配管を見て、なぜこんなにタンクがあるのか不思議に思った。ドイツの化学工場が多数立地するルール地方を流れるライン川は、最後にロッテルダムから海に流れ込んでいるのだ。

ドイツはルール地方の石炭乾留で出るタールから発足して化学工業が勃興したが、第二次世界大戦後の石油化学の発展で、原料のベンゼン、トルエン、キシレン等の芳香族化合物は石化由来となった。これらの原料は海外から輸入し、船便でライン川を遡行し工場へ行き、工場で加工された製品はまた河舟を使ってロッテルダムに運ばれ、貯蔵集積され、ケミカルタンカーで大量に輸出されていた。

難事を好機と成す

帰路の飛行機内で、工事を中断した高浜工場をロッテルダムのタンク基地のように高浜油槽所として再生できないか真剣に考えた。当時、東京湾でタンクを使った倉庫業を行っていたのは、多摩川の河岸に設けた1社のみであった。

市川市の土地分譲の際に海岸の土地を譲り受けた不幸は、油槽所にすれば、逆に船の着船にこの上もない立地となると考え、次の諸点を検討した。

1. 取扱量の大小により容量の異なるタンクが必要になる
2. 1回に運ぶ量はタンカーの船倉によって決まるが、船倉は400m³、500m³が多い



高浜油槽所50周年記念号

STORAGE

創業者木村正輝直筆の書

3. 内容物の危険物四類の第一石油類から第四石油類等の指定数量の倍数の違いにより保有空地が決まるが、隣接するタンク間の距離は政令で定める距離三分の一に短縮しても良い(現在は不適用)
4. 消火設備はタンクの構造、屋根の形状、タンクの直径、引火点によって決まる
5. タンクのブリザー弁から出るベントガスは光化学スモッグの原因になるので、将来適切な処理が義務づけられる
6. 客先の要望により内容物が変わり、その都度洗浄する必要がある
7. タンクを空にしても必ずタンクに数kLの残液が残る
8. タンクの建設にはタンク板の厚み等に関する特殊技術がある

そして、将来貯蔵するタンクの容量、数量が見通せないので、需要に応じた計画にしやすいようにタンク予定地は全面地盤改良することとした。また、タンクの高さはタンク側板に使う鉄板の既成サイズの倍数にして端切れが出ないようにする。船の着岸する岸壁は水深5m、幅70mとした。工事を何度かに分け、第一期工事に400kLタンク6基、650kLタンク5基の計画を立てた。

計画着手と同時に石化メーカーや商社にマーケティングを行った。営業活動を始めて3ヶ月、建設予定の11基のタンク全て契約の目処が立った。さらにタンク完成時には、契約申込みは11基以上になったため、早速400kLタンク6基を第二期工事として増設することになった。

第三期工事においては、1,000kL保冷タンク2基の契約がまとま

り、この案件を核に1,000kL4基、650kL7基、計11基を一挙に建設することになった。当時、景気後退で仕事量が減った工事業から提示された廉価な見積もりに釣られて決定したが、契約は進まず投資資金の調達は困難を極めた。しかし、景気循環で次第に経済は好転し、順次完成したタンクは1基また1基と契約が取れて、タンクに荷が詰まっていっていった。振り返れば不況時に安い工事費用で建設を開始し、完成時は景気が良くなり需要増で順調に契約ができて誠に幸運であった。

手抜き工事の被害に遭う

第三期工事までに完成したタンクにタンカーで入出庫した液体化成品は総てC岸壁で陸揚げされた。

遠浅の続く市川の海は、三番瀬も大潮の干潮では人が歩けるほど浅い。しかし、タンカーが入港するには干潮時でも少なくとも6mの水深は必要である。市川市は埋立造成地を企業に売却する時、遠浅の海を航路巾350mまで真っ直ぐ、水深7.5m以上の深い海まで掘削するという市川航路計画を提示した。

当初、工事費すら十分でなかった市川市は、暫定的に、船橋航路から船橋埋立地沿いに東進し、日新製鋼前を通る水路で入港できるようにした。従って高浜油槽所運営開始の昭和44年時点では市川航路はなく、かつ前述の計画航路水深は4.5mであった。

当社もまた、5m水深の、73mある岸壁をつくる資金手当てに難航した。専門の港湾工事業者は今と変わらず大手企業が多かったため、当社は、岸壁の陸と海を仕切る鋼矢板の打設専門業者を探し出し、工事費は延べ払いで岸壁工事を引受けてもらった。

しかし工事開始後既設の護岸を取外すと、設計図に描かれてい



創業者木村正輝が語る

高浜油槽所誕生物語

高浜油槽所50周年記念号

STORAGE

た護岸裏打のコンクリートはなく、松杭だけで支えられていて工事中に崩壊するような手抜き工事であった。岸壁前面竣工後、水深を確保するために海側を掘削すると、強度不足で岸壁が海側に傾斜した。そこで緊急に補強し、工事業者を不良工事で裁判所に訴えて賠償金を支払わせた。後の税務調査では、この補強工事費用が修理費にあたるか、資産にあたるかで税務当局と争い、経理担当者は精神的圧力に耐えられず顔が歪む顔面神経症になった。C岸壁はこのような難産のうえ誕生し、海上輸送を担うタンカーを着岸させた。

苦難の融資交渉を経てタンク増設へ

順調に発展を続けた高浜油槽所では昭和45年から47年の3年間で実に28基、1万6,600kLのタンクを建設したが、この設備資金は銀行の融資で賄っており、減価償却費が増大したため油槽所単体の収支は赤字が続いた。

また、土地代金とタンク建設費は高浜工場の建設費として融資されたが、第四期工事となる、ステンレス製タンクの設置資金の融資交渉では、「この土地は工場用地として購入したので工場の設備資金以外の使途の場合、融資は断る」と一度は申し渡された。しかし協調融資に参加した日本興行銀行が、東京湾内の化学品タンクヤード経営は将来とも有望であるとの判断を示したので、融資を分担した他の銀行も融資を受入れてくださった。

昭和48年の第一次石油危機で十分なタンク保管設備を持たず苦勞して操業した石油化学メーカーは、液体化学品の安定供給には保管用のタンクの保有が不可欠と認識し、当社にタンクの増設が求められた。

しかし、これ以上の融資は難しいと銀行からは断られた当社は、当時のゴルフ場建設ブームにヒントを得て「タンクの建設資金を提供する会社にタンクをお貸しします。提供された建設資金は保管料と相殺します。担保は御利用いただくタンクで、ゴルフ場の会員権と同じです」と申し上げ、第五期タンクヤードの1,000kL16基、2,000kL3基、4,500D/W ドルフィン栈橋1基の建設資金の大部分を調達した。この増設によって高浜油槽所の収支は好転し、確実に収益が上がるようになった。

タンカーで入荷した石油化学品は石油製品より分析項目が多く、高浜油槽所のお得意様は入荷の度にサンプルを瓶に取って、サーベイヤーに分析を依頼した。分析完了までにほぼ一週間かかり、この間出荷できないことも度々あった。そこで、JIS規格の分析ができる分析室をつくり、顧客サービスをいっそう充実させた。今日生きる差別化による顧客満足度の向上を目指す社風はこうしてできあがっていった。

敗れ去る者、踏みとどまる者

当社と同一時期に近接地を購入した製薬会社は、石油化学産業が提供するアルキルベンゼンから、石鹼に代わる合成洗剤を製造販売し、大成功を収めていた。関東地方に販路がなかった同社は、石油脱硫で副生する硫黄を使ったスルホン化法で、生産した合成洗剤原料を石鹼メーカーに卸売りすることで販路を確立しようとした。

これに対して、大手界面活性剤メーカーは原料から合成洗剤まで一貫生産し、着々と自社ブランドを消費者に浸透させていった。多数派であるもののブランド力が弱い固形石鹼メーカーは、ピカピカの箱からさらさらと流れる電気洗濯機用の粉末洗剤に主婦の心を奪われ、日に日に販路を失ってしまった。近接の製薬会社も、固形石鹼メーカー向けの洗剤原料の販路が細り、遂に工場閉鎖に追い込まれてしまった。

昭和56年、その製薬会社の東京事務所から関東工場売却の打診があった。昭和41年の時点で、当時海面だった現油槽所の土地の分譲価格は坪約18,000円だったのに比し、土地売却希望価格はその10倍以上の坪20万円だった。その頃当社は、酢酸ブチルの下請生産を任されていた大手化学メーカーから、大分コンビナートへの進出を打診されていた。予定敷地面積は1万坪で、生産品目は液体の石油化学誘導品とファインケミカル、そしてヘテロ環化合物の医薬品原料を目指すものであった。当初は当社に土地を分譲する話で始まったが、石化産業の発展でコンビナートの存在価値が高まり、コンビナートの関係会社に分譲先が限定された。そこで、一体運営を計るため、株を持ち合う大手化学メーカーに当社の株式を額面で10%割り当て、株主になってもらった。その後、このコンビナートに進出を希望する会社が続出し、持ち株50%・50%の合併会社をつくり工場を建設した。当社にも折半出資の合併会社設立を求めてきた。この持株比率では合併会社の幹部は当社でなく、現場は当社という構成となり、当社社員の苦勞が報われないと判断して進出を断念した。

結果として、大分コンビナート進出を断念した当社は油槽所の拡大を図ることにした。タンクの更なる増設を目指したのである。そこで、製薬会社の工場跡地は絶好の適地と考えて、昭和56年に買取り交渉を開始した。順調に進むかに思えたこの1万坪の土地調達に、道路向かいの石油会社の市川油槽所が買収に名乗りをあげ、さらに、当時千葉県知事が、京成電鉄のバス車庫用地として市川市長への土地譲渡を求めてきたので、交渉の主導権は製薬会社に移った。この製薬会社とは10年前の市川市分譲価格の10倍からの交渉であった。製薬会社の京都本社に訪問する度に、「よその会社はもっと良い値段を出しております」などと専務に言われ、知事に、「地元企業を潰すのか」と直談判し、市長への申し入れを

撤回させた。また、石油会社の交渉人とは、土地を折半して買い取ることと決着を図った。時に昭和57年7月であった。製薬会社専務の、京都の御公家さん口調の粘っこい交渉に歯軋りし、東京駅に帰着の度、同行した三宅専務と焼き鳥屋でやけ酒を飲んで鬱憤を晴らしたものだ。

この2年にわたる交渉の間も、大分コンビナート建設は着々と進められ、完成したプラントからは次々と製品が搬出されていった。従来からの関東圏の需要家向けに増大する大分コンビナートの製品を販売するのにあたって、タンカーから液体化成品を受入貯蔵して出荷する東京湾沿いのタンクが必要だったため、当社に1,000kLタンク5基の建設と、貯蔵保管の契約を申し出てきた。

防災に注心しなければ 化成品事業はできない

全国各地にコンビナートが建設され、操業を始めるのに伴って重大事故も度々発生した。特に、昭和49年に水島コンビナートで起きた重油漏洩事故では、重油約43,000kLが漏洩し、その内7,500kL～9,500kLが海に流出して瀬戸内海が汚染され、漁業者は甚大な損害を被った。こうしたコンビナートの事故多発で事故防止と防災能力の向上が求められ、石油コンビナート等災害防止法(石災法)が制定された。この法律により、事業者自身の負担と責任で、大型化学消防車、高所放水車、泡原液搬送車の3点セットの設置と、海への油流出時拡散防止に使うオイルフェンス展張船の24時間常勤の職員配置が定められた。

市川市消防局長の見解では、市川臨海地区の油槽所はコンビナートの事業所のように、それぞれの事業所がパイプで繋がっていないので適用はない見込みだった。しかし、同法の国会審議の過程で、油槽所所在地にも同法が適用され、六法全書の石災法には、二俣新町、高谷新町、本行徳、高浜町が適用地域として記載された。

当社の第六期タンクヤード工事で平行して京葉臨海北部地区で石災法が適用され、油槽所・事業所9社10事業所で石油コンビナート等特別防災区域協議会が設立されることとなった。初代会長に小生が市川消防局より指名され、就任した。設立した石油コンビナート等特別防災区域協議会では会の運営費の分担割合をめぐる議論が紛糾し、主張が通らず脱退する会社も出たが、単独防災では事業者の負担も重く、かつ消防局の認可も期限切れとなる状況であった。それに対して石油コンビナート等特別防災区域協議会に加入する場合は、法の施行後、運営開始まで2年間の猶予期間(単独事業所では1年間)が認められると、脱退会社は頭を下げ復帰した。

これと並行して、事業所所在の市町村に共同防災と同等の防災

資機材の設置義務が課され、市川市も早急に消防署の増設が必要となった。もともとの行徳は、江戸川辺りに船着場の常夜燈のある成田山詣の通り道だった。成田山詣はお江戸日本橋岸から船を出して隅田川を東京湾に下り、今度は江戸川を遡行し、行徳の船着場で降り、行徳街道を船橋経由で成田に行く行程だったのである。街道に沿って家が並び、その裏は海岸に向かって塩田が続く塩の産地であった。その行徳が、東西線の開通で瞬間にそこを埋め尽くすかのように家が並び、ビルが建設されていった。高いビルの住民となった人々からは、ビル火災時に人々を救出する梯子自動車設置が必要だと、市川市に要望が集まるようになった。小生はコンビナート法制定で共同防災センター設置に尽力する日々が続いたが、この間に消防法の一部が強化された。

主要な改正は、

1. 同一防油堤内に設置できるタンク数は5基×2列で10基
2. 同一防油堤内に設置するタンク間相互距離を3分の1に緩和する規定の廃止
3. 防油堤の4周に消防活動ができる6m幅の道路の設置
4. 消防活動に使う道路は大型消防車が通行できるように隅切りする

といった点であった。この改定により、同じ面積に建設できるタンク容量は3分の1となり、年を追って高騰する土地代とともに、以後新設されるタンク保管料は既設に比べて2倍近くのコストとなり、東京湾岸に油槽所の新設は絶えてなくなった。

後に高浜油槽所にLPGタンクを設置した際、コンビナート法のレイアウト規制に抵触するのを避けるため行った改良工事の際、竣工検査に来所された消防庁の監督官は、改正危険物施設の技術基準の第六期タンクヤードと既設第五期タンクヤードを見比べ、前者は「随分土地利用がもったいないですね」と言っておられた。

奉加帳の筆頭になる

石災法で設立が決まった石油コンビナート等特別防災区域協議会の最初の仕事は、前述のように、大型化学消防車、高所放水車、泡原液搬送車の3点セットの買い揃えと、タンクから漏れた油の海上拡散を防ぐオイルフェンスの展張船の調達であった。そして、これらの防災資材機を収容する消防署の建物と、この建物を建設する土地を用意すること。また、完成までに消防隊員を募って採用し、訓練して災害発生時に備えることが必要であった。

各社の危険物設備内容と指定数量取り扱いの多寡に応じて、



創業者木村正輝が語る
高浜油槽所

誕生物語



1973年 第三期工事が完成した頃の高浜油槽所

取り扱いの設備資金を分担してもらい、あわせて今後の共同防災の運営費をいかなる基準で各社に分担してもらうかを決めねばならなかった。大型化学消防車、高所放水車、泡原液搬送車の3点セットの当初見積もりは1億3千万円であったが、選定作業をする技術委員会各社の論議が紛糾し、この間に見積もったメーカーが互いに疑心暗鬼に陥り、積みまれた見積書が埃を被る間、値引きに次ぐ値引きで5千万円安く購入が決まった。

引火性危険物を取り扱うコンビナート法事業所に防災施設の設置を定めた法律は、企業に課した防災施設と同等能力の増強を、所轄市町村にも課した。蓮田から都会に変貌した行徳の行政需要は多大で、道路・学校、保育園・行徳支所の増強に加え、先に述べたように高層マンション火災の人員救出用の梯子消防車を備えた消防署の設置を求められていた。コンビナート法事業所の共同防災センターの設置・運営に目処をつけた私は、市川市に法に対応した消防署の早急な設置を求めたが、某市長は「善処善処で3年」の議会答弁で遅々として予算化は進まなかった。初代共同防災センター所長から、民間側が建設費の一部を寄付するほど熱心に市川市に要望すれば、市川市は、この寄付額と同額の予算化は容易であると聞いた。瀬戸内海全域の重油汚染で成立したコンビナート法では、この法律の推進のため、市町村のコンビナート法対応額の2倍の県支出と、県予算の2倍の国の補助金が予算化された。そこで消防署建設に必要なコンビナート法適用事業所の寄付金額を算定し、コンビナート法事業所に寄付金応募者になっていただこうと各社の事業所長たちと協議したが、横並び意識の所長さんは自分の一存で寄付金の発起人にはなれず、当社のオーナー社長の木村が発起人になってくれれば、とおだてられ、奉加帳の筆頭に当社が金額を記した。

当時の日本石油は、この法律の発布数年前に現在の市川油槽所の危険物施設の建設許可を得ていて、タンク建設予定地では地盤改良の土盛りが行われていたが、タンクヤード建設に住民の反対を受けていた。そこで、日本石油が行徳南地区に消防署を設置するために動けば、反対運動の拠点であるマンションの住民が軟化するのを見込んで日本石油を説得し、賛同していただいた。その後、初代共同防災所長の長岡さんと二人でコンビナート法該当事業所の本社を回り、日本石油の寄付同意を披露し、1社ずつ協賛の幅を広げた。先に共同防災から脱退し、再加入したあるオーナー社長は「なんで税金を払っている当社が消防署の建設費を寄付せねばならんのか」と抵抗されたが、二度三度訪問し、最後には寄付に不賛同は御社だけ、と口説いて賛同を取り付けた。

このように、紆余曲折があったものの結局はコンビナート法該当事業所の全社に拠出いただき、市川市に、目論見どおりの金額を寄付した。日本石油市川油槽所の大タンクが危険だと建設反対に旗を振ったマンションの住民は、寄付金で建つ消防署に梯子自動車が設置されると市川市から聞いて納得し、旗を下ろした。

LPG事業進出への苦闘力闘

一方、製薬会社からの用地買収を始めた昭和56年、原油取引で多額の収益を上げていた中堅商社「兼松」の燃料本部・液化石油販売部から、東京湾岸にLPGの二次基地を設け、都市ガスの普及が困難な地方にボンベ詰めLPGガス販売を展開する話が持ち込まれた。高浜油槽所から出荷される液体石油化学製品はすべて産業用途であるのに対し、ボンベ詰LPGは明らかに民生用途で、景気の動向に左右されない安定した収入源になるように思えた。

しかし、当時高浜油槽所の責任者であった小寺さんから、投機

的な原油取引で利益を上げる商社と、多額の設備投資をして地道に年月をかけ資金を回収するスタイルの東洋合成が組むことに疑問を投げかけられた。だが、この時期に展開し始めた感光材事業は、景気変動の激しい半導体産業の影響をまともに受け、山谷の厳しい事業であった。これに比べ、民生用のプロパンガスは人々の炊事や風呂焚きに使われ、生活に欠かせないものだった。兼松の部長から「景気が悪いから風呂に入るのをやめる人はいませんよ」の台詞に説得されてしまった。

それから近くの川崎、市原コンビナート、大井川河口の石油ガス基地に立ち並ぶ球型タンクを見て回った。大きなゴムボールのような球型タンクを支えるマッチ棒のような支柱、大きな地震で一本が折れれば次々に座屈し、球が地面に降り落ちて、瓦斯が噴き出し、この蒸気に引火して原爆型のキノコ雲が大爆発とともに天に駆け上る……そんな悪夢を見た。

大型現場組立形球型タンクは、屋外で雨風にさらされながら職人の手で高張力鋼板を溶接してつくられる。溶接の歪みはバーナーで炙って取る。全く人手頼りだ。高浜につくったLPGタンクの鋼板の厚さは3.2cm。人手で何層も溶接を重ねたら、スラグ（鋤滓・「かなくそ」）も巻き込むのではないかと、底の部分を天井から持ち上げての溶接（下から上へ作業する溶接姿勢。熟練が必要）でポア（ポアソン比。歪みのこと）のない溶接ができるのか、心配が尽きない。

計画を推す兼松の鉄構部から、九州有明海の日立造船に2,000m³の焼鈍（焼きなまし）炉があると、耳寄りな話が持ち込まれた。総合商社の兼松は石油、化学、繊維と種々の商品を取り扱う部門を持っていた。当然、鉄、非鉄金属の原料から製品まで商売として扱う人材を揃えていた。早速10月某日、九州小倉の兼松LPG基地を見学し、日立造船有明工場で巨大な焼鈍炉を見た。巨大な建物で覆った炉は、現在の当社千葉工場と同様に、計画した温度のプロファイル通りに温度をコントロールする高機能炉で、後日当社のLPGタンク用に兼松が調達した富士車輛製の枕型円筒形2,000m³タンクの焼鈍記録チャートは、入力プロファイルと実績の乖離が10度もなかった。造船工場で示された炉の、内法寸法図に入る最大限の寸法でLPGタンクは設計された。日本最大の横置円筒タンクは、3年後、台船で太平洋岸の海を渡り東京湾に入り、3基ともクレーン船で吊り上げられ、高浜の基礎にピタッと据え付けられた。

LPGタンクの高圧ガス施設は昭和60年2月に設置許可証が交付され、同年8月に竣工式を迎えることができた。陸上の施設は計画に従って3年間の歳月を費やして黙々と建設が進められたが、LPG船で運ばれてくる液化ガス専用の棧橋の許可申請は困難を極めた。LPG・ナフサ専用のオーシャンタンカーが満積で東京湾

高浜油槽所50周年記念号

STORAGE

に入港、船舶火災を起こし、海上保安庁の消防艇の必死の消火活動も功を奏せず火災は拡大し、LPGに引火した。爆発の恐れが出て、船を東京湾外に曳航し、鹿島沖の太平洋で海上自衛隊が潜水艦の魚雷を発射して、船を海底に沈めて消火する騒ぎとなったからである。太平洋戦争後、実践経験のない潜水艦は軍艦でない商船に魚雷を何発も撃ってやっと撃沈し、海上自衛隊の面目を潰す後日談を残した。その事件の後遺症で、東京湾に入る危険物船（港則法の危険物品は消防法の危険物品と異なる）を増加させない措置が取られた。それで、着船する岸壁、棧橋の新設増設が厳しく制限されていたのだ。

これら施設の許認可には13の省庁が係わり、4年毎に開催される、東京湾を含む重要港湾審議会を通さねばならなかった。当時の小寺高浜油槽所所長は千葉県土木部の協力を得て、横浜にあった運輸省の地方港湾局に陳情を繰り返した。担当の千葉県土木部の役職者の方は朝5時に起床し、朝9時前には横浜の地方港湾局の門前に小寺所長とともに立ち、開門を待って担当者を訪ねた。

LPG計画が始まってから、このように足掛け5年の歳月をかけて、液化ガス専用のB棧橋は設けられた。重要港湾審議会でも東京湾内の着船設備で承認されたのは、市原の光興産のエチレンセンターのナフサ用棧橋、水俣病の公害賠償金を稼ぎ出さねばならないチッソ石油化学の出荷棧橋、LPG車の幹線道路交通量の減少に有効な当社のLPG専用棧橋の3件のみであった。

この時期に相次いで起こった瀬戸内海水島コンビナートの重油海上流出事故、先述の東京湾内ナフサ・LPG混積タンカーの炎上事件などで防災規制が強化され、高浜町も石炭法の地域指定を受け、京葉臨海北部地区石油コンビナート等特別防災区域協議会と市川船橋地区海上共同防災協議会を設立し、各協議会の会長を務めるなかで、製薬会社の跡地利用計画を進めていったわけである。

同じ時期に、ポジ型感光材ナフトキノンのNAS、NAC製造工場を市川工場に建設した。設備資金10億円の8割は借入金で充当した。建設後の昭和58年度、59年度の収支は赤字になる見通しを素直に銀行に説明して設備資金を融資していただいた。この融資は、昭和49年決算は赤字だったが、以後歯を食いしばって每期



高浜の土地にLPGタンクが据え付けられる



創業者木村正輝が語る

高浜油槽所誕生物語

高浜油槽所50周年記念号

STORAGE

連続で増収増益を続けて得た金融機関の信用の賜物であった。幸い、赤字は昭和58年1期で克服できた。

LPG、ついに初出荷

工事計画に多忙なある日、かつて東洋紡のポリウレタン繊維「スパンデックス」生産設備の紡糸溶剤・DMF回収精製装置のプラント輸出(昭和48年に契約が成立)の時に、ソビエトのモスクワに同行した川崎重工の担当者が高浜油槽所にひょっこり現れた。ゴストニツア(ロシア語でホテル)ウクライナで夜毎にウォッカを飲み交わした童顔は10年の歳月にも損なわれず、コンビナート法で義務付けられた災害時停電に備える自家発電機の売り込みに、ニコニコして現れた。

聞けば川崎重工は米国の産業用ガスタービンメーカーから技術導入し、小型ジェットエンジンに発電機を取り付け、コンビナ-

ト法該当の事業所に売り込もうと来訪したのだった。通常の自家発電機の動力源はディーゼルエンジンで、これに比べるとガスタービンの燃料効果は悪く全く売れなかった。しかしガスタービン発電機の長所は、過負荷に強く回転数が落ちてもエンストしない点である。一方ディーゼルエンジンの始動はタンクに貯めた圧縮空気で行う。慌てて失敗して始動を繰り返すとタンクは空になり、以後エンジンは動かなくなる。また、過負荷になると自動車のエンスト同様にパタンと止まり消火ポンプの水が止まってしまう。そうなるのは火災時はお手上げた。燃費が悪いと言っても万が一の災害時、そう度々あるわけがない、と思ってディーゼルエンジンとの性能比較を聞いた後、価格を聞くとなんと2千万円であった。続けて「納入実績は?」と聞くと、答えにくそうに「今のところゼロで、当社が買えば一号機になる」とおっしゃる。この答えに「初物だから半値でどう?」と折り返すと、「持ち帰って回答します」

とのこと。後日この値段で決着し、このガスタービン発電機は、以後28年間高浜油槽所の自家発電機の役割を担ってくれている。

昭和45年の高浜油槽所建設開始以来、今の高浜油槽所があるのは、中途入社した植松さん、エンジニアリング会社の杉田さん、元自衛隊隊員の営業の江幡さん、油槽所長の山沢さん、小寺さん、オリエントサービスの逢坂さん等、高浜油槽所に誇りを持ち、高浜油槽所をこよなく愛する人々の献身の賜物です。厚く御礼申し上げます。

創業者
木村正輝



高浜油槽所 沿革



1971年の高浜油槽所完成祝賀会

1971年12月

第一期工事完了
400kLタンク×6基、650kLタンク×5基 高浜油槽所を開設、液体化成品タンク保管業務開始(千葉県市川市)

1973年3月

第三期工事完了
950kL×4基、650kL×7基

1971

第二期工事完了
400kL×6基

1972年3月



1972年高浜油槽所の地盤改良工事

1975年4月

第五期工事完了
1,000kL×16基、2,000kL×3基

1975年5月

鋼矢板岸壁
(現C岸壁)完成1,700DWT

1975年7月

ドルフィン栈橋
(現A栈橋)完成4,500DWT

1980

第四期工事完了
400kL×5基

1974年6月



1984年1月

ドルフィン栈橋
(現B栈橋)完成
2,000DWT

1990

第六期工事完了
(液体化成品貯蔵能力合計 47,500kL)

1983年8月



1983年増設第一期タンクヤード祝賀会

1985年9月

LPG基地完成
(タンク容量
1,800kL×3基、
ローリー出荷設備×7
スパン)、
LPGの委託保管業務
開始

2000

2002年7月

第七期工事完了
※LPG跡地に建設
2,000kL×2基



第7期タンクヤード工事

2010

立体自動倉庫、
全自動ドラム充填
設備完成(MWS併設)

2003年3月



立体自動倉庫建設工事

第八期工事完了
1,000kL×4基
(液体化成品貯蔵能力合計
55,400kL)
(TK-1901~1904が1,000kL
の場合=55,600kL)

2006年12月



第八期タンクヤード工事

2021

新管理棟完成
(分析室拡充、
屋内貯蔵所併設)

2018年4月



現在の高浜油槽所



高浜油槽所の取り組み

高浜油槽所の強さは、日々のきめ細かい顧客サービスとチームワーク。
その源泉ともいえる普段の取り組みを紹介します。

STORAGE

安全安心の徹底

日頃より高浜油槽所の安全操業へのご理解とご協力を賜りまして誠にありがとうございます。高浜油槽所では、毎月第3火曜日を安全強化日と定め、月1回運送会社様に向け安全をテーマとした発表を積込前の早朝7:00より実施させていただいております。危険物を取り扱う油槽所では、爆発・火災等による事故を未然防止することが必須です。ローリー/ISOコンテナ車からの「オーバーフローを防止」するため、これまでの傾向から要因や正策をお伝えしたり、「ヒューマンエラー防止」のため、ベテラン、新人に関わらずドライバー様に向けて手順の見直しや日常点検をお願いしたり、一滴の漏洩でも止める強い気持ちで気を緩めない工夫を行っております。また万が一に備えた初動対応についても、一時荷役停止装置の使用、地震時の対応を繰り返しお伝えしています。その他にも化学の見地から「溶剤の危険性」「静電気対策」についてのテーマも取り上げ、幅広いリスク低減に努めております。これからもお客様、運送会社様、弊社の三位一体となった安全への取り組みを進めていきたいと存じますので、引き続きご協力をお願いいたします。



安全強化日に実施している指差呼称



お客様、運送会社様をお招きし、着火実験並びに消火方法を実演

新人研修会

高浜油槽所では、お客様新入社員向けのTakahama Logistic Schoolを開催しています。業務、分析、技術、現場のセクションに分け、それぞれの講師が担当し、荷主様へ高浜油槽所をより良く知ってもらうための工夫を重ね臨んでいます。これまでに、積み込み現場を見学していただくというような体験型の授業も取り入れることで、お客様からは好評の声をいただき、自社の製品がどのような過程で入荷・出荷されるのかを肌で感じていただいています。担当した講師にとっても貴重な体験となっており、このイベントを通して新しい発見や自身の勉強にもつながっています。

近年は、コロナ禍の影響により、対面での研修は難しいため、Webでの研修を開催しました。初めての試みで手探りでしたが、動画を使った資料を取り入れるなど、少しでも興味を持っていただけるように試行錯誤を繰り返し、受講していただいた方からもお褒めの言葉をいただき、無事に成功させることができました。



新人研修風景



コロナ感染拡大防止策でWeb研修会を実施

災害対策

近年増加している自然災害は地震、津波、高潮、台風、大雨、豪雪、猛暑、火山噴火など多種多様であり、常に脅威にさらされています。高浜油槽所では、行政機関、防災関係機関と連携し総合防災訓練や自主防災訓練を定期的の実施し、対応力を強化することはもちろん、油槽所内の施設・設備の改良、改新、補強を計画的に実施して、お客様が安心してご利用いただけるよう努めております。



港湾施設の耐震補強工事



官民合同の総合防災訓練



立体自動倉庫の耐震補強工事

コミュニケーション

BIG DREAMS



2020年10月1日、ロジスティック事業部の野球部発足。COVID-19で閉塞感を打破するため、仕事終わり、キャッチボールを始めたことがきっかけでした。日を追うごとにメンバーの野球への情熱が増していき、休憩の合間には野球トークで盛り上がり、ついにはオーダーメイドのグローブを購入する者まででできました。このようないい雰囲気も積み重なり、試合をやってみたいという声も多くなったため、物流営業課の鈴木課長が会社に申し出をされ、野球部が発足しました。

野球部の主な活動は、市川市民大会、市川商工会議所主催の大会への参加です。試合結果はどうであれ、自然と楽しめる雰囲気や同じユニフォームを着て試合をする結束感が良い雰囲気を生み出し、仕事の活力を生み出しています。

女子会



お客様企業との受注業務担当者間による女子会を開催しています。普段の電話でのやり取りではお話しできない、仕事のことから私生活までたくさんお話しさせていただき、とても有意義な時間を過ごすことができました。女子会を通してお互いを知ることができ、その後の業務もより円滑になりました。コロナが落ち着きましたら引き続き女子会を開催したいと思います。一早く開催できることを心より祈っております。

つぎの50年へ、つぎの挑戦へ

《 高浜油槽所 》

みんなからの Message

ロジスティック事業部と高浜油槽所で働く20名の社員たちに、
次の50年に向けて挑戦していきたいことを聞きました。



『地球と共に』

高浜品質保証課 係長 馬場 真吾

昨今、地球温暖化に歯止めが掛かりません。高浜油槽所で地球の一員として何ができるのか。私の目標は大型水素貯蔵所の設立と排出有機溶剤ガスのゼロ化です。カーボンニュートラルを実現する東洋合成を世界へ発信していきたい。



『お客様と高浜油槽所が 心とWEBで繋がる活動』

物流業務課 課長 加藤 永子

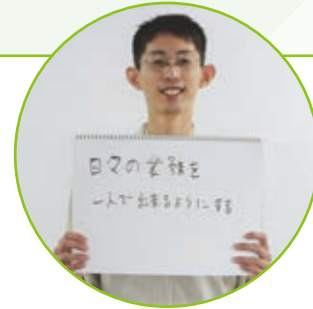
物流業務課を約16年経験しております。その中でお客様や運送会社様、高浜油槽所の仲間に多くのことを学び今の自分がいます。私の5歳からの信念は「人の役に立つこと」です。この信念を今後も貫き、関わる全ての方に貢献できるよう全力を尽くしたいと思います。



『油槽所の安全面、 品質面でのレベルアップ』

参与 永野 浩

約15年ぶりに高浜油槽所に復帰しました。その間、化成品事業部でいろいろな経験をさせていただき、たくさんの方と出会い、数多くのアドバイスを頂戴しました。この経験とアドバイスをいかし、高浜油槽所の更なるレベルアップを目指していきたいと思っています。



『日々の業務を一人で できるように覚える』

物流業務課 長岡 祐太

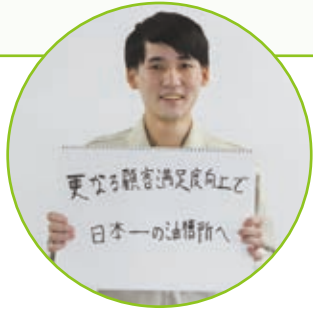
2021年9月1日より入社してまだまだ分からないことだらけですが、徐々に職場環境や業務内容に慣れていきたいと思っています。また休日には野球の練習もあるので未経験ですが積極的に参加したいです。



『ゴルフのベストスコア更新、 100 切り！』

高浜技術課 係長 荒井 庸平

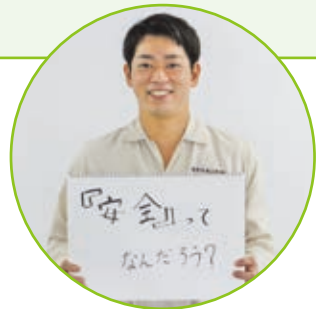
2008年に入社。約13年間、高浜技術課に配属され設備関連の仕事を中心に担当しています。技術面で油槽所の品質や安全を優先し、貢献できることを大事にしています。現在の趣味はゴルフです。まだまだ下手ですが楽しく上手くなればと思います。



『更なる顧客満足度向上で 日本一の油槽所へ』

物流業務課 飯田 大夢

現在の高浜油槽所は、立地の良さや過去の諸先輩方が築いたお客様への信頼関係により、全国トップクラスの油槽所となっています。私たちの努力により、更なる顧客満足度が見込めれば、高浜油槽所の地位は更なる飛躍を遂げることができると考えています。



『「安全」ってなんだろう？』

高浜技術課 主事 足立 龍太

「安全」は状況や時代により必要な物・行動・考え方が変化していきます。当油槽所では変わりゆく「安全」を時代とともに変化させ、無事50周年を迎えることができました。私たちはこれからも時代の変化とともに「安全とは何か」を考え、皆様に安心をお届けできるよう戦い続けて参ります。



『お客様にたくさんお会いして、コミュニケーション に長けた顧客満足度向上を目指します！』

物流業務課 渡邊 彩

コロナ禍で中々来所いただけないなか、電話でのやり取りがメインとなっているため、お顔を拝見してお話したいです。こう見えてアニメ・ゲーム好きな二次元オタクで、生き物が好きです。将来はバードカフェを開きたいです！



『作業効率UPで、 時間の有効活用』

物流業務課 係長 芝本 さやか

高浜では少しずつですが、自動化に取り組んでいます。以前からRPAを作成することに興味を持っていますが、残念ながら実行できていないのが現状です。あまり得意な分野ではないのですが、挑戦していきたいと思っています。



『めざすぞ、ロングヒット』

副主事 及川 勝彦

野球部に所属していますが、いまだロングヒットを打っていません。厳しい練習に耐え守備は少しずつ上達していると思いますので、今後の目標は2塁打か3塁打もしくは、ホームランを打つことです。これからも油槽所がロングランできるよう支えていきます。



『名実ともに BIG な漢になる！』

物流業務課 主任 金子 貴大

前職の金属製錬現場で操業改善に取り組むなかで培った問題解決スキルや、幅広い視野、物事を推し進める力に磨きをかけて、高浜油槽所を今よりもっとご満足いただける油槽所にしたいです！そして私も見た目だけBIGではなく、中身もBIGな漢になります！



『イレギュラーな問題もスムーズに対処できるようになる！』

物流業務課 金子 香希里

入社2年目になり、日常の業務に慣れてきたなかで、イレギュラーな問題にも対処できるようになりたいと感じたので、このことを書きました。趣味は歌を歌うことで、最近ギターを練習し始めました。



『育てる』

高浜品質保証課 齋藤 聡子

5月に第一子を出産し、現在育休をいただいております。子を育てるという責任を新たに持つことになりましたが、私自身、まだまだ未熟なことばかりです。自分自身を育て、専門知識を育て、後輩を育て、職場復帰後も油槽所の一員として精進していきたいです。



『唯一無二の私』

物流業務課 係長 柏木 絵美

私が大切にしていることは、お客様をはじめとした他者とのコミュニケーションです。お困りの際に相談したり頼っていただけるような、そんな存在で在りたいと思っています。また仕事に限らずいろいろなことに興味を持ち続け、視野を広げていきたいと思っています。



『温故知新と新陳代謝を 両立させるチームに』

物流業務課 幅 千尋

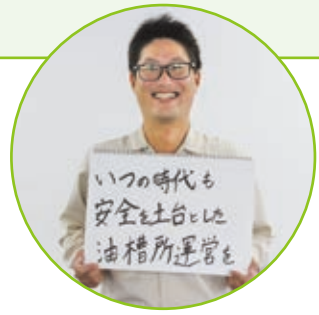
入社からもうすぐ2年となりますが、高浜油槽所で学ぶことはまだまだあります。50年の歴史から作られた今の高浜を知るとともに、新しいものを取り入れてお客様やチームに対してより良い仕事をしたいけるよう心掛けていきます。



『I LOVE 高浜!』

物流営業課 課長 鈴木 智則

私は高浜油槽所が好きだ。歴史と伝統があり数多くのノウハウが詰まった油槽所だから。入社以来ロジスティック事業部で17年、お客様に恵まれ、仲間にも恵まれたから。そして今年50周年を迎えた。更なる進化を目指し100周年を迎える時には伝説となりたい。

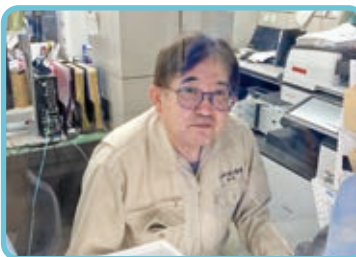


『いつの時代も安全を 土台とした油槽所運営を』

物流業務課 主任 豊永 泰治

次の60年、70年に向け油槽所運営に携われることは誇りです。安全とサービス向上の両立を目指し邁進していきます。

みんなからの Message



Takahama
Chemical Tank Terminal